

時空孔明傳

第二卷 游侠の士

諸葛 玄子 著



ここまでの流れ

自らの存在に、価値や意義を見出せない『私』は生き続ける事の無意味さに耐え切れず“その日”を命日にしようとするが、そんな時に現れたのは『私』が人生の師として尊敬する、諸葛孔明先生だった。

夢か幻か、孔明先生は時空を越えた未知の世界へ“記憶”と引き換えに連れて行ってくれる、と言うのだが……。

次に『私』が目覚めた時、『私』には名前は勿論、一切の記憶がなく、体調も優れない。

何か何だか解らない状況の中『私』は“偽善行為”で仕方なく援^{たす}けてやった、と言う、生意気さだけが取り得のような青年、諸葛孔明と出会うのだが……。

登場人物

諸葛亮 しよかつりやう

字は孔明。あざな こうめい 晴耕雨読を営む青年。

身長が高く、見た目もなかなか心地いいが、
騙されちゃいけない！ 性格は謎だらけの変な人。
いつも白羽扇を手放さない。

諸葛均 しよかつぎん

孔明殿の弟。

孔明殿とは正反対で、心優しく人懐こい少年。ひとなつ

徐庶 じょじよ

字は元直。げんちちよく 孔明殿の心友。快活な親分肌で

周りを明るくしてくれる好漢。

目次

第八話

玄子

第九話

均ちゃん

第十話

恕おもいやり

第十一話

紙と文字

第十二話

脇息きょうそく

第十三話

徐福と徐庶

あとがき

時空孔明傳

第二卷

游侠の士

第八話 玄子

「玄子^{げんし}？」

名前さえも、記憶と共に失ってしまった私に孔明殿は“存在の証”を与えてくれた。

「玄子……いい名前だな。名前負けするなよ！」

元直殿がバシッ！ と私の背中を叩いて、励ましてくれるのは嬉しいけど、もう少し手加減をしてくれても構わない。

「孔明殿。どういう意味ですか」

無愛想なのが玉に瑕^{きず}な孔明殿は

「それくらい、自分で考えてみる。嫌なら変えればいい」

私とは視線さえも合わせようとしない。

“玄子”の名前は嬉しいけど、もっと素直になってくれても、全然構わない。

「孔明……お前は」

元直殿は、ハア〜と溜息をつく

「“玄”っていうのは、不可思議で捉えどころがない……孔明風に解釈すると“変なやつ”という誉め言葉に値するっ

てところだ。きつと」

へ、変なやつ？

そのどこが誉め言葉なの？

よりもよつて、孔明殿に変人呼ばわりされるわけ？ 根

拠は何？

という二つの疑問を抱いた私に向かって、孔明殿は

「私が敬愛する叔父は『諸葛玄』しょかつげんと言ったが、叔父の場合は

“玄妙で奥深い器の持ち主”という意味だ。君とは違うから
な」

孔明殿の趣味は、喧嘩けんかを売ること、なのかもしれない。

「だからな、玄子。お前もいつかは、奥深い修養しゅうようを兼ね備えた人間になってくれ、という期待を籠こめているんだ……恐らく。そうだと……思う。多分」

つて、段々確信が薄れていくの？

「元直兄の補足がなければ、私の言葉の真意さえ解らないのか、君は。先が思いやられる」

油断も隙もありやしない！ 元直殿が注釈ちゅうしやくしてくれなかつたら、完全に嫌なやつに逆戻りしていたよ、孔明殿。

人を寄せ付けないと言うか、本心を簡単に見せてくれないと言うか。とりあえず、素直じゃないよね。

それでも、孔明殿の本音が知りたくなつた私は

「孔明殿。玄子という名前を頂きながら、孔明殿の言葉の意味さえ解らない私……名付けたことを後悔していますか」

白羽扇を持っていない孔明殿の左手を取って、心意に迫ろうとした。

「えっ？ あ、いや。君が、精進してくれば、それで、いい。」

光栄に……… 思え」

孔明殿が意表を突かれた表情を露あらわにした。

「孔明殿。玄子って呼んでみてください」

私が思わず両手で孔明殿の手を包むと

「げ、げん、し」

孔明殿が声を詰まらせながらも、私の名前を呼んでくれた。

「玄、子」

しかも、二回も。ああ、何か清すがすが々しい！

孔明殿に勝ったような気がする！

しかも今回は健康的に！

私が喜びに浸っていると、

「玄……子」

孔明殿の喉仏のどぼねが一度、ゆっくり動いたかと思うと、覚悟を決めたかのように、声を搾しぼり出した。

「手……」

手？ 孔明殿が、落ち着かない視線を私の手に送ったので
「ん？ ああ」

私は特に、何とも思わず、自然に手を引いた。

「潔癖症なの？」

そんな呑気のんきな私の問いを、打ち消すように
「気にならないのか？」

孔明殿と元直殿が、緊張感のある声を重ねた。

「は？ そつち？」

三人に共通した一言と、奇妙な沈黙は

「ぶはははははははははは！」

同時に笑いを導いた。

「こ、孔明殿！ ごめんなさい！ 玄子、の名前が嬉しくて、
つい……ははははは」

今になって、孔明殿の固まりかけた表情のわけが、やっと
解った。

もう、笑うしかない。

「き、気に入ってくれたなら、それで、いい」

孔明殿は白羽扇で顔を扇あおぎながら、天井を見上げると、脱
力しながら笑った。

「わ、わ、笑える！ お前、本当に玄子、だわ。」

確かに孔明は他人に触ふれられるの、嫌がるけど……そうい
う次元じゃねえな。孔明のああいう顔、初めて見た……ぎゃ
はははは」

元直殿は、人一倍派手に笑うと

「で？ 玄子。これからどうするんだ？」

お腹を押さえながら、平常心を取り戻そうと、話題を換え
た。

元直殿の話題転換に沿って、気を取り直した私は、そろそ

る潮時しおどきだ、と判断した。

「体力も回復したし、名前も貰もらえたんで、この辺で失礼しまあす」

今が出て行くのに、丁度いい頃ころ合あいかも。

短い間だったけど、何だかんだ言っつて、孔明殿には助けられたなあ。

今度会うまで、助けて貰ったことを、後悔されないような人間になっていなきゃ……。

「孔明殿、元直殿。このご恩は当てのない出世払い、ということ、気長にご了承下さい。」

孔明殿、助けてくれて、本当にありがとうございます。玄子こって名前、大切にに使わせていただきます！」

出て行くなら日が墮おちる前がいいだろう、と考えた私は、孔明殿と元直殿に、それなりに丁寧にお礼を言って

「では、お元気で！」
と立ち上がると

「今から、行くのか？」

孔明殿が私の着物の袖を引っ張った。

「はい！ 思い立ったら吉日だし。荷物もあるわけじゃないから、まさに身一つで放浪します！ 掃除くらいはしていきますんで。ご安心下さい」

名前以外、何もないって虚しいけど、身軽だなあ。

「今日は、もう遅い。明日にしろ」

孔明殿は袖を掴んだまま続けた。

「ここは……隆中は山奥にある。道中何か遭っても、次は援けてやらないからな。それでも行きたいのなら、勝手にすればいい」

そこまで言い終えると孔明殿は、パツと手を放した。

「うわあ」

孔明殿の力は思いの他強く、手を放された途端、思わず足元がふらついて、転びそうになってしまった。

「それに……女の夜道の一人歩きは危険だ。これくらいのこととでさえ、手助けが必要とは……それにしても、君の手は冷たすぎるな」

孔明殿はとつさに、後ろへ倒れ掛かった私の手を引いてくれた。

「……玄子！ 薬草だけを器用に残したな」

バレタか！ ギコチナイ顔して手を掴んでいる割には、しっかりと健康診断と、食べ残しの検査をしているとは。恐るべし！ 孔明殿！

「あ、ありがとう」

私が体勢を整えながら、話題にされたくない薬草には見向きもせず、孔明殿の隣に腰掛けると

「君は……乱世に似つかわしくなくらい、素直だな。大丈夫だろうか」

孔明殿は優しい人なのか、冷たい人なのか、謎だらけだ。

「玄子。孔明はこう見えて、人一倍心配性なんだ。いや、三倍くらいはあるかもな。多少なりとも恩義を感じているのなら、こいつにこれ以上、些ささい細な事で心配をかけるな」

元直殿は笑いながら言っているけど、その言葉に嘘はなさそうだ。

でも……。

「孔明殿が心配性!? 全然そう見えなかった」

もしかして孔明殿って、人間嫌いなんじゃないやなくて、一人の人間に対して、しつかり向き合おうとするから、無闇むやみやたらに他人を受け入れないのかな？

私がそんな風に思いながら、マジマジと孔明殿の顔を見ると

「見かけによらず、料理が上手い心配性で悪かったな。だが私の心配性なぞ、見かけ通りの、元直兄の世話好きには遠く及ばない、といったところだ」

孔明殿は笑いながら、白羽扇を私の頭上に置いた。

「心配性と世話好きかあ……」

元直殿は確かに、面倒見良さそうだ。

さつきからずっと気遣って、空気を繋つなげてくれているし。これは納得。

「ま、俺たちはざっと、そんな感じだから、今すぐここを出て行かなくてもいいんじゃないのか？　なあ、孔明？」

孔明殿は

「勝手にすればいい、と言ったばかりだ」

他人事のように言っているけど

「お節介ついでに、この近辺を案内してやる。」

地理が解らなければ、どこへも行けないだろうからな」

一時の感情だけで、偽善行為ぎぜんこういはしない、と言うよりは、そもそも偽善行為なんて、器用な真似を出来る人じゃないんだ、と漠然とだけど、私は感じていた。